ヨハネ 13 章 12－20 節
「互いに足を洗う」

本日の12節以下は、弟子たちだけでなく、私たち一人ひとりに語りかけられている御言葉です。私たちの罪を背負って十字架にかかって死んで下さった。主であり先生である主イエスが、十字架の死の苦しみと屈辱を引き受けて、奴隷のように私たちに仕えて下さることによって、私たちの罪を赦し、清めて、新しく生かして下さったのです。その救いを与えられた私たちは、主イエスが私たちにして下さったことを模範として、私たちも互いに同じようにしていきなさい、と伝えています。しかし互いに足を洗い合うというのは、言うのは簡単だけれども、行うことは本当に難しいです。主イエスはそのことをよくご存知です。だから「はっきり言っておく。僕は主人にまさらず、遣わされる者は遣わした者にまさりはしない（16節）」と伝えました。いろいろな不満を覚える私たちに主イエスは、「お前は私よりも偉いつもりなのか、自分を何様だと思っているのか」と言っておられるのです。さらに主イエスは次の17節で私たちを励まして下さってもいます。「あなたがたは幸いである」と。私たちが本当に幸いな、喜ばしい人生を生きる道を示して下さっているのです。その道は、「このことが分かり、そのとおりに実行する」ところに開かれています。つまり神さまがこの上なく自分を愛して下さり、汚れた足を洗って下さったことが分かるなら、私たちは、主イエスがして下さったことを「そのとおりに実行する」ことが、つまり互いに足を洗い合うことができるようになるのです。そこに、本当に幸いな歩みが与えられていくのです。主イエスに倣って、人の前に跪いて足を洗うことは、確かにプライドを打ち砕かれ、恥辱や苦しみを甘んじて受けることですが、しかしそこには、神に愛され、赦され、生かされる本当に幸いな歩みが与えられるのだ、と主イエスは私たちを励まして下さっているのです。そして19節で、事が起こった時にそのことを弟子たちが悟り、そして「わたしはある」ということを信じるようになるために、今この最後の晩餐において主イエスは弟子たちに語っておられるのです。

他の三つの福音書に比べてヨハネは、この最後の晩餐の場面にものすごく力を込めています。ヨハネは、主イエスがこの最後の晩餐において、弟子たちをこの上なく愛し抜くことによって、彼らが、主イエスの十字架の死と復活の後、「わたしはある」ということを信じるまことの信仰者となるための備えをなさったのだ、ということを語っているのです。教会は、つまり私たちは、主イエスの十字架の死と復活によって神が実現して下さった救いにあずかり、主イエスに従っていく弟子の群れです。「あなたがたも互いに足を洗い合いなさい」という御言葉は、主イエスが私たちを派遣しておられる御言葉です。そして20節は、主イエスによる派遣に応えて互いに足を洗い合うために、根本的に必要なことは何かを語っています。「わたしの遣わす者を受け入れる人は、わたしを受け入れ、わたしを受け入れる人は、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである」。信仰者は誰もが、主イエスによって「遣わされた者」です。自分もそうであり、他の信仰者もそうです。私たちは、目の前にいる信仰の兄弟姉妹を、主イエスから自分に遣わされた人として受け入れることを求められているのです。このことこそが、その人の足を洗うことの第一歩です。目の前の兄弟姉妹を、「わたしの遣わす者」として受け入れないなら、主イエスをも、父なる神をも受け入れることはできないのだ、と主イエスは教えて下さっているのです。